

職業紹介の祖・八濱徳三郎の生涯と業績

樋 口 美智子

A Study on the Life and Achievements by Tokusaburo Hachihama,
the Pioneer of Employment Exchange

Michiko HIGUCHI

Tokusaburo Hachihama was born at Kasaoka-cho, Oda-gun in Bitchu-koku (now, Kasaoka City, Okayama Prefecture) in 1871 (Meiji 4). After he worked at a cocoonery laboratory as a student, and learned its technical skills, he came back to his native town and took an active part in a learning school as an instructor. Just then, a church was built in Kasaoka City and there he was baptized at the age of 21 and he entered the special course of divinity at Doshisha University at the age of 23. After many turns and twists, he understood the Christian truth. While Hachihama had close contacts with Kosuke Tomeoka from the same town, he issued Kiristokyo Shinbun and made a survey of indigent people as a part-time employee of the Ministry of Home Affairs.

In 1909 (Meiji 42) the New York State employment agency was established and in England the first Labor Exchange Law was proclaimed. At the same time in Japan, Tokusaburo established the social welfare home at the age of 39 during his mission work as a minister. He set to social work giving employment and employment reference for jobless persons coming to the church. At this time he built up the foundation of his social worker as a philanthropist.

After that he engaged in the Osaka Municipal employment agency as a part-time employee and then he followed the public and private employment agencies. And also he took part in the establishment of social work and the guidance of the unemployed workers.

In the first half of his lifetime he worked as a minister and in the latter half as a social enterpriser. He saw the lower-class poverty with his own eye and tried to find a sure means of living for a lot of people, saying "There is no social work without religious morals." from a humanitarian standpoint of Christianity and as a social reformer.

Key words : Christianity employment exchange social work

キリスト教 職業紹介 社会事業

はじめに

大正の初め わが国公益職業紹介事業のあけぼの時代

に「東に豊原、西に八濱あり」と永井柳太郎氏の帝国会議における名ゼリフで比較された両先達の存在と業績は大きいものがある。

「東の豊原」とは東京の豊原又男の事で1920(大正9)年6月に神田駅のガード下に東京の公営事業として最初の「東京府中央工業労働紹介所」を設立し、最初は顧問、翌年に所長となり、そこを拠点としてこの事業の国営化に猛烈な運動を展開した。

「西の八濱」は1912(明治45)年6月「財団法人大阪職業紹介所」を創立し、職業紹介事業を中心とする授産、授職の総合的な社会施設を経営し、実践活動を続けている。大正年間の大阪地方における職業紹介事業で彼の関与しないものは一つもなかったとさえ言われている。この事業の国営化には先駆的な役割をも果たす光栄を担っている。

豊原の『労働紹介』、八濱の『下層社会研究』両書の発刊が共に職業紹介法施行前年に当たるというのも興味深いものである。

本論文においては、八濱徳三郎の生涯と業績について考察し、その時代背景についても述べてみたいと考えている。八濱徳三郎の生涯について詳しくは本文中に述べようと思うが、概略について以下記に述べる。

八濱は1871(明治4)年4月30日備中国、小田郡笠岡町(現在の岡山県笠岡市)で生まれた。彼は、福山、岡山、大阪で5年間丁稚奉公の後、上京して当時農商務省が設立した養蚕試験場に伝習生として入所している。修了後、長野県上田市で実習していたが、郷里笠岡に養蚕伝習所が開設されたため指導者として帰笠の後に就職している。

当時岡山での伝道で有名だった金森通倫牧師らにより笠岡にも教会が建てられた。

彼自身の書いた『年譜』によると、21歳の時に「明治24年12月1日笠岡組合基督教會二於テ牧師片桐鏑太郎ヨリ先禮ヲ受ク」1893(明治26)年23歳時に「京都同志社神學校二入學ス、米國傳道會社の學資給興を謝絶し神學館の掃除夫竝ニ図書館員トシテ参ケ年間苦學ス」苦学しながら26歳で卒業し、岡山県津山において米國宣教師ホワイトと共に伝道に従事している。

八濱は卒業当時、「肝心の信仰を失ったのでありますから困ったものであります」と後日語っているが、以後母校での比較宗教研究によって改めてキリスト教の真実にふれたことがきっかけとなり、東京で28歳のとき留岡幸助と共に『基督教新聞』、29歳で米國宣教師グリーンと雑誌『福音叢誌』を編纂している。

日露戦争が始まり、八濱自身の変化の中で「この國を賭して戦争の時、私は国民のために生命を捧げる決心をいたしました。」とし、34歳より41歳までの7年間、京都洛陽組合教会、神戸活田基督牧師として赴任している。前述の『年譜』によると、「明治四十一年(参

拾八歳)神戸活田組合基督教會牧師二轉任ス傳道ノ傍ラ社會事業ニ志シ人事相談所ヲ開ク 明治四拾貳年(参拾九歳)職業通信社、十字屋等ノ社會福祉施設ヲ開始シ失業者ノ就職斡旋並ニ授産事業ニ着手ス」この頃、特にキリストの社会思想に感銘して、常に弱者の友たる決意をし、山野光雄によると主として刑務所、細民窟、木賃宿、工場等を訪れ伝道したようである⁽²⁰⁾。

この時を期に社会事業家、八濱徳三郎の誕生といえる。

この頃英国で「職業紹介法」が1909(明治42)年に公布され、また、2年後には失業保険法が制定されるという、職業紹介事業における大きな転機の時期到来といえる。1932(昭和7年)4月7日の新聞『基督教世界』(第2513号)から4月21日(第2515号)までの3回に渡り「わが半生を語る」と題し講演筆記が掲載されている。その中に「1909年といえば英国に於いて初めて労働紹介法が公布された年であり、ニューヨーク州立の職業紹介所が設立された年であります。そうした時に於いて偶然にも吾が日本の貧弱なる一牧師が職業紹介の真似をして、貧者、失業者、胡ろんな者の世話をするようになったのであります。」「過去20余年に私は財団法人大阪職業紹介所、同天満職業紹介所、大阪労働共励館等の外に財団法人大正労働紹介所、同大阪少年ホーム等を創立し大正七年の米騒動後には大阪市の囑託として市立職業紹介所、市立共同宿泊所などの創立経営に参与し、或いは職業輔導会の主事として失業者の輔導、公益質屋等の経営に従事しこれら多数の人々の生活の安定を得たものは決して少なくありません。」

八濱の言葉の中にも「宗教道徳を無視せる社会事業はない」とし下層社会の実況に触れる中で、キリスト教主義のもとに営み、実績において見るべきものがあつたと思われる。

この八濱については先行研究が少ない。以下、人物紹介的な、八濱の生涯について、大正期社会事業家の月例会の度に出された雑誌、『救済研究』の分析、後の論文を中心とした職業紹介、キリスト教を視点にした考察など発見できたものについて記して見る。

この論文を書くにあたっての参考とした生江孝之著『日本基督教社会事業史』1931(昭和6)年280頁に「八濱徳三郎氏」として15行の紹介文のみである。全社協編『人物でつづる社会事業史』1971(昭和46)年刊中の小倉襄二氏による「八濱徳三郎」として八濱著書『下層社会研究』中の一部に解説と紹介文がある。『雑誌・健康保険5月号』1977(昭和52)年山野光雄氏により「続・灯をかかげた人びと(第16回)=職業紹介事業の

開拓者＝八濱徳三郎」として同じように人物紹介を行っている。同じ年、『聖母女学院短期大学児童教育学科研究記要第4輯』の中で中条明子氏が「八濱徳三郎 社会事業思想」として大正期の大阪地区において社会事業に関する専門誌『救済研究』が発表されていたがこの中で八濱の児童福祉部門での業績を中心に文章解説を行っている。職業紹介の分野としては雑誌、『清流43号(盛夏号)』財団法人日本職業協会1979(昭和54)年の中で安田辰馬が「職業行政史 古典シリーズ(43)」八濱徳三郎先生著 職業紹介事業の精神 「職業紹介法施行拾年」(昭和8年3月刊)所収の中より八濱の論文解説を行っている。又、中島寧綱『職業安定行政史』社団法人、雇用問題研究会1988(昭和63)年「公立職業紹介所職員の勤務」の中で東西の先覚者として東の豊原、西の八濱を紹介している。これは公立職業紹介所創立期の基本理念を中心に述べられている。この後、室田保夫著『キリスト教社会思想の研究』不二出版1944(平成6)年により八濱徳三郎の全体像がはじめて浮き出された。八濱のキリスト教思想や中条明子氏と同じく『救済研究』の分析によるものが中心となっている。

八濱の郷里笠岡市においてはこの室田氏が初稿の「八濱徳三郎研究序論」『同誌社人文研キリスト教社会問題研究30号昭和57年2月』発表の後、同年、7月調査研究のため来笠を期に業績を知ったと聞いている。以後、八濱の郷里での研究はなされておらず資料も皆無の状態であった。

本論文において、先行研究者の未開の分野、とくに八濱以前の職業紹介の部分と八濱が取り組んだ公的職業紹介と民間職業紹介事業に焦点を当てて考察しまとめて見たいと考える。

第1章 思想形成期

(1) おいたち

先行研究の各文献において、八濱徳三郎の略年表が記されているが、誕生1871(明治4)年より77歳1951(昭和22)年まで記された『八濱徳三郎年譜』⁽¹⁾によるものが多い。

徳三郎は、岡山県小田郡笠岡町二五四七番地で1871(明治4)年4月3日八濱里吉、カメ年譜では亀)の二男として生まれる。(里吉は福山市今町、西山宇介 三男)1883(明治16)年、13才で福山、岡上で丁稚奉公した後、1885(明治18)年5月大阪で三年間奉公している。八濱家は笠岡で十本の指に入る酢の商いをようしていたようで丁稚奉公は生活苦からでなく、見習奉公であったと考えられる。

1889(明治22)年上京して、農商務省が滝野川西ヶ原に設立した東京西ヶ原養蚕試験場に伝習生として入所し1980(明治23)年伝習生終了後、長野県上田に於いて養蚕の実地伝習を受けている。

この後「1891(明治24)年(21才)郷里笠岡二於イテ、小田郡養蚕伝習所ヲ開ク、12月11日、笠岡組合基督教會ニ於イテ牧師片岡麟太郎ヨリ先禮ヲ受リ」⁽²⁾と年表にあるが、1993年笠岡市、市史編纂室谷口靖彦へ紹介すると「1890(明治23)年ごろ廃止された笠岡製糸場(山陽製糸場)の跡地に開設されたようですが、その跡は残っておりません。また『岡山県史』近代編や『小田郡誌』にも記録がありません。」との返事があった。

笠岡市に住む知人に1993(平成5)年八濱の事を尋ねたが「祖母が、その養蚕伝習所に行って居り340名が働いていた。と母親から聞いたが、亡くなっているのではっきりわからない。」とのことだった。

笠岡市笠岡2547番地が誕生地のため1993(平成5)年、関係者への聞き取り調査を行った。この番地は友人の実家のため、この友人の生存している叔母等に聞き取り調査したがよくわからなかった。残念な事に、当時この叔母から、最近亡くなった近所の老女がよく八濱家の事について知っていたと聞いた。

又、前述の市史編纂室(1993年返事)によると「徳三郎の入信の動機や経緯については、よく判りませんが、笠岡組合基督教會は『岡山県史』には1884(明治17)年『笠岡町沿革史』には1886(明治19)年3月に設立されたとあり、現在、仁王堂町にある教会の会堂は1894(明治27)年に建てられたものといえます。当時、同志社出身の岡山教会の牧師、金森通倫や、笠岡教会の片桐麟太郎牧師らによる熱心な伝道によって信仰にめざめたと推察できます。」との事であった。編纂室の資料より、1993年当時お元気だった笠岡市園井に在住の八濱花子氏に聞き取り調査ができた。(現在生死不明)それによると「徳三郎より五歳年下でよく遊んでいた従兄弟である松三郎が、クリスチャンであったと思える。その子どもの君子さんが熱心に教会に通っていたので、その影響が考えられる。」と不明とされていた入信の動機を語ってくれていた。

なお八濱花子氏は「ヤハマハナコ」と呼び八濱徳三郎は「ハチハマトクサプロウ」と呼んでいる。これについては、奈良市西大寺に在住で徳三郎の長男の妻八濱和氏によれば、「以前は「ヤマハ」と呼んでいたが、岡山県児島湾に面したJR宇野線に「八濱駅」があり「ハチハマ」と呼ぶ。源氏の流れの八濱家としてのルーツがあり、徳三郎以後「ハチハマ」に変更した。」と謂

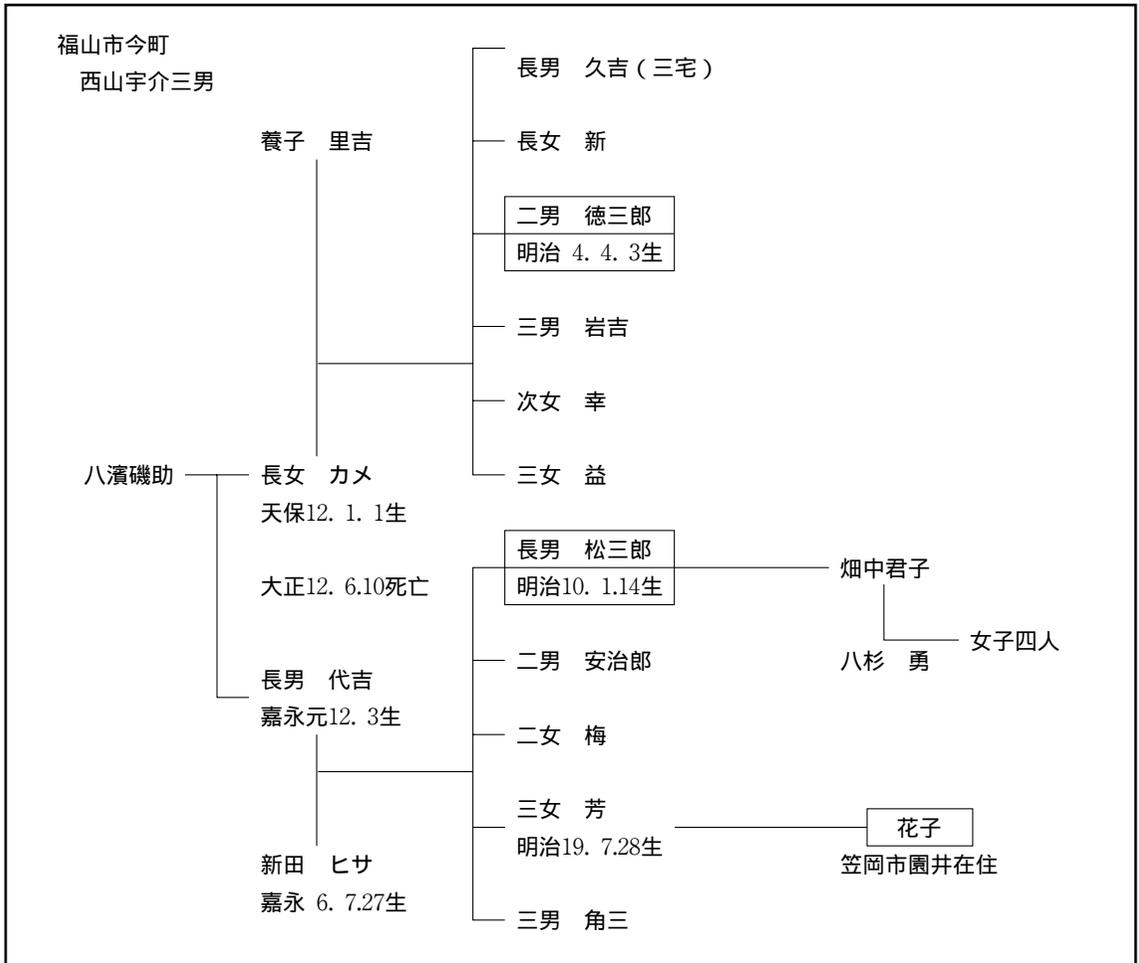


図 - 1 八濱家系図 この家系図は笠岡市市史編纂室資料より作成した(3)

れを話されている。八濱家系図は図1に示す。

(2) キリスト教との出会い 牧師時代

1893(明治26)年23歳に同志社神学校に入学している。米国伝道会社の学資給付を謝絶し、神学館の掃除夫、図書館の手伝いをしながら学費を工面していたようである(2)。1896(明治29)年6月26日に同志社神学校別科を7名卒業している。その出身地及び卒業論文については表1に示す。

24才の時叔母ヒサの親戚三宅家(現・笠岡市金浦町)において相続者がいないため長兄久吉氏が徴兵免除のため養子縁組をしている。そのため在学中に徳三郎が、八濱家の家督相続をしなければならなかった。(家督相続者は徴兵免除であった。)

『基督教世界』2513号1932(昭和7)年4月7日～2515号4月21日まで3回連載されたもので、「わが半生を語る」大阪職業紹介所長(記者より)これは本

年1月同志社神学館において講演せられたものの筆記である。(校閲済)とある。それによると「私は一職業紹介所の所長であると思っていません。広い意味の社会事業家であると思っています。私はこの見地から

表 - 1 同志社神学校別科 卒業論文

八濱徳三郎(岡山)	百記ノ人世観
大島銘太郎(滋賀)	中江藤村
山内 鹿三(福島)	朱子宗教哲学
松本 次男(福岡)	いざや
樋口 貫(京都)	神道進化史
秋吉辰二郎(大分)	徳川時代論理史
三谷公一(和歌山)	三福音書に於ける救の説

出所：近代日本キリスト教新聞集、日本図書センター、マイクロフィルム(4)

して「社会事業家としての予が半生」と題して、私の辿って来た道筋のところどころをひろ拾ってお話して見たいと思ひます。明治29年に同志社別科神学校を卒業しましたが、その頃、私は信仰を失って煩悶してをりました。元来、私は苦学をして別科神学を修めたのであります。即ち最初の3年間は神学館の掃除夫をしながら勉強し、後の1年間は図書館員をしつつ勉強をしました。それ程にして勉強を致しながら卒業時には肝腎の信仰を失ったのでありますから、大いに困ったのであります。それで卒業後は約7、8年東京で新聞記者、雑誌記者をして生活を致しました。」

しかし同志社別科神学校を卒業して信仰を失いながらも『基督教新聞』675号1896(明治29)年7月10日岡山県津山において基督教の伝道を行っている。『基督教新聞』712号1897(明治30)年4月9日によると「雑報『舞子演教役者會記事』第24報として3月30日時懇談会 題『教役者の自修』「...八濱徳三郎は青年傳道師としての決心を語り...」と伝道中の姿をみる事ができる。『基督教新聞』第720号1897(明治30)年6月4日発行作州津山基督教會報「ホワイト氏の教師として来津せられ居たる八濱徳三郎氏は大いに教会のためにも尽力せられたしが、今度勉学のため再び同志社へ帰校せらるることなり、後任には桑田氏日不津せらるるはずなり。」

津山では一年間伝道に従事ただけで、この記事によれば八濱は1898(明治31)年の12月頃、上京する一年と数ヶ月間、京都で勉強した事になる。

この時期、彼の処女論文と思われる「古今ト考」が『六合雑誌』⁽⁵⁾第208号1898(明治31)年4月25日から第210号6月25日まで3回連載されており、文中の万葉集その他の占歌に対する想いは八濱自身が晩年長男の義和宅で過ごした時の短歌作りに結びついたと考えられる。(1994年義和妻和から「よく短歌作りをしていた。」と聞き取り)又、同じく六合雑誌への論文として第222号1899(明治32)年6月15日から第225号

9月15日まで共に八濱督郎の名前で雑録として『古今禁厭考』が発表されている。第222号には後の『救済研究』第3巻八濱「職業紹介所に就いて」安田辰馬『清流』での八濱徳三郎論文「職業紹介所に就いて」に示された英国社会主義の原点と見られる、川上清の『英国社会主義の木鐸口パート、オーエンを論ず』特別寄書も掲載されている。続いて第226号から1903(明治36)年1月15日の第265号までは八濱掬泉(キクセン)の名前で「私生兒と基父母の統計的研究」「金銭に関する兒童の觀念」「自殺研究」「蓮門教の教祖及びその教理」「天理教祖及び其の教理」「日本地理と日本宗教」「古代埃及人の宗教及風俗」「不良少年感化事業」の論文を掲載している。八濱徳三郎と実名を使用せずにペンネームを使っているのも意図したものがあるのだろうか。これらの一部は後の編著『迷信の日本』1899(明治32)年において日の目を見るに至る。⁽⁶⁾これらの論文について八濱のかいた文章の中で見る事はできないが、1889年同志社で森田久万人の指導により比較宗教研究に専念していたと思われる。信仰を失った徳三郎にとって伝道の体験が、何か別の世界を求めようとしたのではなからうか。また、それが原点の同志社での学びとなり基督教との対比を感じたのではないだろうか。

1897(明治31)年28歳のとき上京して、朋友とも言える留岡幸助と共に組合教会系の基督教新聞に従事している。と言っても、目的は勉学のためであり、アルバイトとしての収入程度であったと思える。⁽⁶⁾このことについて「それこれする間に八濱徳三郎君が遣って来てくれ、編輯を助ける事となった。八濱君へは多少の御礼はしたが、根が貧乏の新聞であるからこれもほんの言い訳文であった。」と留岡幸助も語っている。⁽⁷⁾

留岡と八濱は同じ別科神学の卒業生であり岡山県出身という郷土愛によって結ばれていた。前述の長男義和氏の妻、和氏も次女漢子氏も「二人は親友だった。」と1994年・1999年の聞き取り調査で得た。

表 - 2 基督教新聞掲載の論文・雑録

第798号1898(明治31)年12月2日	八濱きく泉 雑録 早稲田村話
第799号1898(明治31)年12月9日	きくせん 街談巷説 八濱生 新刊批評 『慈善問題を読む』
第800号1898(明治31)年12月16日	八濱きく水 雑録 基督教文壇の時弊
第801号1898(明治31)年12月23日	八濱きく泉 つゆ子 きくせん 街談巷説
第822号1899(明治32)年5月19日	きく泉子 訪問録

出所：近代日本キリスト教新聞集、日本図書センター、マイクロフィルム

この頃の基督教新聞に八濱きく泉、きくせん等の名前で論文、雑録が見られる。(表2)

『基督教新聞』823号1899(明治32)年5月26日発行の新聞で寄稿原稿を本社宛に送付と言った記事が見られる。「生義今般学窓多忙の故を以って基督教新聞編集の職を辞し候、新聞宛の寄稿通信は凡て本社の方へ御送付被下度願上候 牛込区市ヶ谷葉王寺前町74(一心館)八濱きく泉」⁽⁸⁾

この年に留岡幸助は有名な「東京家庭学校」を創立しキリスト教による感化事業の道を求めている。

八濱は基督教新聞編輯を辞して後4ヶ月程して9月頃より『福音叢誌』の編輯を米国宣教師をグリーンと行っている。この事について基督教新聞第839号1899(明治32)年9月15日「八濱徳三郎氏には村田勤氏の後を承け福音叢誌の記者として専ら編集に従事せらるべし」⁽⁸⁾

「福音叢誌」は1896(明治29)年6月、村田勤を編輯人として、「主としてイエスキリストの福音に基づける基督教、即ち天啓の基督教を表面せん事を勉む。」という目的で発刊し「世界の精神的及知識的の進歩が相互国民の思想交換に待つ所あるや、実に絶大なりと謂わざる可らず……欧米国民の中に顕はるゝ斬新にして有益なる思想」を一種のドグマに固執することなく、日本に紹介し、啓発することを主眼として置いていた。⁽⁹⁾四年余りこの「福音叢誌」にかかわっているが、外国雑誌の翻訳文を掲載するうちに、世界的視野を広げて行ったものと思える。

又、先の年譜の中では『迷信の日本』1899(明治32)年11月を編集し警醒社書店より発刊している。この著書について、山野光雄氏は雑誌『健康保健』の中で「八濱が『基督教新聞』の仕事に従いながら、米国牧師グリーンと共著『迷信の日本』を書いたのもその頃である」と述べている。⁽¹⁰⁾

しかし、前述の室田保夫氏は、『キリスト教社会福祉思想の研究』の中で「この本にはグリーン(D・C・Greene)の序文につづき八濱の『緒言』があるが……又、この著書の主題たる「迷信」の研究は森田久万人の教示により、数年来の研究結果であると断言し、上梓した目的を「一は国家の風教に緒を啓かむとする」⁽¹¹⁾」ことにあるとし八濱は『迷信の日本』を編む事によって、由来の課題であった研究に一応のピリオドを打ち、次に本格的にキリスト教研究への道を歩むべき礎石としてそれを考えていたと思われる。⁽¹²⁾」と述べている。

八濱がキリスト教に入信したのは、5歳年下の従兄弟松三郎の影響と前述したが31歳の時の論文に「我が

基督の神性を信ずるの理由」として「果たして然らば余が基督の神性を信ずる何かと謂うに其の理由は基督の十字架よりも其の死よりも寧ろ基督の生活である。尚ほ之を切言せば基督の奇跡よりも其の復活よりも其の昇天よりも寧ろその人格である。尚之を簡言せば余が基督の人格に存する救世的精神即ち道義の勢力である」⁽¹³⁾と心境を述べている。

『年譜』によると1899(明治32)12月29日に長野県上伊那郡伊那町、福澤庄一郎二女と(26歳)と結婚している。

これについては、聞き取り調査の時八濱が晩年を過ごした自宅で長男の妻、八濱和は「福澤てるの実家は裕福な財産家で当時は珍しい娘を産婆の学校に遊学させていたようだ。」とその当時の卒業写真を見せられた。

「わが半生を語る」の中で八濱は「そのうちに日露戦争が始まりました。この国を賭しての戦争の時、私は国民のために生命を捧げる決心をしました。そして当時、組合教会中で一番の貧乏教会を撰んで、京都の洛陽教会に赴任しました。しかも病妻と二人の頑はない子供を伴ふて赴任したのでありました。洛陽教会の三年間は私の一生涯に於いて最も苦難の時代でありました。薄給のため家を借りることができないので、軒は傾き壊れ殆ど人の棲まふ事の出来ない会堂裏の番小屋に住み、糟糠僅に其の日を糊するに過ぎない貧乏の上に、平素蒲柳の身の妻は数回も瀕死の重症に冒され、二人の幼児は栄養不良のため夭死すると云ふ、悲哀痛恨の経験を嘗めましたが、一方には此等の不幸逆境のため愈々信仰は励まされ、夜を日に継いで伝道に努め、三年間に約四百名の教会員を作りました。其の教会員の間には今現に社会の各方面に活躍して居る立派な人物が少なくはありません」⁽¹⁴⁾

『年譜』によれば妻とるが1904(明治37)年に肺炎1906(明治39)年に心臓病により京大病院内科に入院している。3男弘和(明治37年12月11日出生・38年2月19日死亡)宣和(明治39年12月18日出生40年5月7日死亡)とある。

日露戦争という事態に、京都市各基督教教会所属各団体が主体となり1904(明治37)年2月19日の会合で「京都奉公十字会」についての議案が可決され成立した。趣意書を4月に発表し、広く寄付金を募集していくことになり、八濱も役員17名の中に加わっている。

八濱は1905(明治38)年4月21日按手礼を受け正式に京都洛陽基督教教会に牧師として就任している。実に3男弘和死去2ヶ月後のことである。この時の心境は複雑なものがあつたに違いない。この洛陽教会を辞し

たいきさつについて前述の室田保夫は『キリスト教社会福祉思想史の研究』の中で「洛陽教会50年史の資料」より1908(明治41)年2月29日臨時総会が開かれ四条教会との合併問題が議論された。これは市の中央に一大会堂を建設し全市に向かって統一伝道を行う為」という目的で、当初四条教会より案が出されたものであり、洛陽教会側は、これに対し、役員会を開き賛成の議に決したが如上の総会で否決されたのである。八濱はこの合併問題の不成立の責任を負って同年3月辞任することとなった。そして、辞任した後、活田教会に招聘される迄の間、八濱は共励会の雑誌編纂に携っている。」⁽¹⁵⁾

八濱は六年間過ごした洛陽教会よりまた一番貧しい教会を求めて神戸の活田教会に赴任した。この教会について「わが半生を語る」の中で会衆に対して深く観察し「この教会は神戸の場末の教会で会衆の大部分は貧乏人や失業者でありました。貧乏のため夫の他行中に操を売ったといふ婦人さえありました。又、嘗ては大家の主人公であつたものが、事業に失敗して親子三人ボロをきて教会に来るといふ有様でありました。私は、教会内に難儀苦勞している人々の多いのに胸を打たれざるを得ませんでした。教会に来る人々の中には食うや食はずの人々が少からずあるのであります。然るに自分は牧師として、訪問と称しては信者の家庭に上がり込み、お茶を飲みお菓子を頂戴して、お世辞と御機嫌を伺っている。これで基督の聖旨に適ふものであらふかと反省した時、ヤコブ書第二章 わが兄弟よ、栄光の主なる我らの主イエス・キリストに対する信仰を保たんには、人を偏り視るな。金の指輪をはめて華美なる衣を着たる人、なんぢの会堂に入りきたり、また粗末なる衣を着たる者いり来たらんに…」と富む人・貧しい人に対するキリストの「聖言を読んで、無限の感慨に撃たれ、之れでわならぬ、神の御旨にかなはぬと確信し、牧会の傍ら人事相談所を作り、無実の罪に泣く人を援け、親子仲違ひしているものの中に入って家庭を潔めました。また、三宮の上の方に職業通信社といふものを設けて職業紹介を始めました。失業者は次ぎ次ぎ来ます。失業者は来るが職業はありません。そこで十字屋といふ一軒の店舗を設け、此等の失業者にインクを売らせたり、新聞配達をさせたりしました。之によって廿名以上の人々に仕事を与えました。」

この頃のことを『年譜』の中で「四拾叁年(参拾八歳)神戸活田組合基督教會牧師二転任ス 傳道ノ傍ラ社會事業ニ志シ人事相談所ヲ開ク」「四拾肆年(参拾九歳)式月拾九日父里吉死ス 職業通

信社、十字屋等ノ社會施設ヲ開始シ、失業者ノ就職施並ニ着手ス」と記されている。

『基督教世界』第1369号1909(明治42)年12月2日発行には「今回八濱牧師は『弱者の友だんらんがため無報酬を以て民事・商事・刑事・人事其他世務一切の相談に応ず』との看板を掲げ即ち独力で以て世務相談を開始せり。既に牧師の尽力によりて一人の刑事被告人過日放免せられたり」とあり、ここでは世務相談所という名称がある。

こうした底辺の人々の生活指導に当たったのは牧師としてのつとめと考えている。しかし、牧会事業と福祉事業の間に立って彼の立場は窮地に陥っていた。「わが半生を語る」の中で「恰度炎天・旅行が木陰を慕ふて集まるように、教会には失業者、前科者、貧乏人などが其の数を増して来ました。其の戦力を恃んで容易に在来の会員に下りません。遂に両者の間には氷と炭・水と油のように感情に疎隔を醸すに至りました。そこで教会の重なる人々は牧師たる私に対して其の短を挙げ、其の醜を発いて攻撃を始めました。」反対は教会内のみでなく、同労の牧師仲間からも起こりました。斯くて1910(明治43)年には教会を去らねばならぬ破目に陥りました。」と語っている。次女漢子からの聞き取りによると、「父は自分の一生の内でこの時が一番苦しかった。仲間の牧師と職を求める人々との板ばさみになっていた。インクを売ったり新聞配達の話をよくし、来た人を励ましたそうだ。」

小倉襄二は『人物でつづる社会事業の歩み』の「八濱徳三郎」中で「八濱は、これらの事業を専心斯業に捧げんとして教会を辞してしまつたという。」⁽¹⁶⁾と述べているが、実際の八濱の気持ちは「教会から棄てられ、友にも顧みられず其の悲痛はいまなほ、むび忘れることができません。二人の男の子は幼く、しかも生後間の無い女の子を連れて無限の悲憤と非愁を懐かしきながら神戸を去つたのであります、折りも折りとして其の夜は大雨で、濡れ鼠のやうな姿で妻の郷里信州伊那を指して落ちつて入つたのであります。」と「わが半生語る」辛い気持ちを語っている。

第2章 社会事業

(1) 細民調査

信州伊那に妻、子を預けて上京したことについて「先ず家内の実家に妻子を預け置いて私は兎にも角も親友の留岡幸助を頼って単身上京したのであります。『神は自分にかくせと命じ給ひ、かつ自分は生命を捨ててまで此の使命に殉さんとしているのであるから神は必ず

や自分のための仕事の準備をし給ふべし』と信じて上京したのでありました。」と「わが半生を語る」の中で、留岡幸助との間柄について先の先行研究者の中で同郷人だから知り合っていたという文章が多かったが、この文章に八濱は、はっきりと親友という言葉を使用している。

1911(明治44)年八濱は細民調査に加わるため上京もしている。これに年譜では「明治四拾四年(四拾叁歳)専ら社会事業スルタメ活田教曾牧師ヲ辞シ東京ニ移リ差当り内務省囑託トシテ第一細民調査ニ従事ス」と記されている。

この時代は幸徳事件もあり、社会運動、労働運動における「冬の時代」といえる。特に東京は資本主義社会の矛盾が蔓延していた。

この1911(明治44)年の内務省調査は大がかりなものであった。それ以上にものとしては1903(明治36)年の農商務省の「職工業業」や1909(明治42)年内務省の「農小作人、工業労働者生計状態」調査があった。規模の内容の詳細にわたる点で大きく飛躍していた。この調査について生江孝之は『人道』第115号1914(大正3年)2月15日発行の中で「即ち明治四十四年六月調査に着手其の第一回は主として東京下谷における約三千戸、一万五千余人の細民にたいする戸口調査を行ひ、且つ職上の生活状態木賃宿・貸長屋・職業紹介の状況または細民の金融機関等に就き調査を遂げたのである」⁽¹⁷⁾

「わが半生を語る」で「そのうちに内務省で我那では最初の細民調査施行する事になりましたので留岡・生江両氏の下に、内務省に囑託として之に従事する事になりました。内務省の囑託と云へば立派であります。実は日給一円余で毎日朝から晩までテクテク歩いて、下谷・浅華の貧民調査をするのでありました。特に私の担当は、口入屋と質屋と、高歩貸しの調査で、私に取っては誠に得がたい修業になりました。』述懐している。この調査の内容については翌年三月『細民調査統計表』として公開された。

営業内容や生活実態を調査した、この時の経験で「どのようにして貧困に落ちたか、なぜ不況時にも地方から求職に出てこなければならなかったか」といった失業者の実態をつかみ、それが就職紹介の実践に生かしている。

特に1913(大正2)年より1918(大正7)年にいたる六年間に新聞・雑誌に公にしたものを一冊の著書とした『下層社会研究』1918(大正9)年の中で、八濱はこの時の事を「往年著書が内務省細民調査囑託として、東京の下層社会を調査し、而して多年自ら社会事

表-3 細民調査結果の数字(18)

小石川の細民長屋	149棟
東京全体の木賃宿	307軒
下谷の質屋	91店
日本橋・浅草両区の口入業・寄子業	141機関
東京の職工家庭	344世帯
細民戸別調査	下谷・浅草両区の一部
木賃宿調査	小石川区の一部
細民金融機関(質屋)調査	下谷区
職業紹介所(雇入口入業)調査	日本橋浅草両区
職士家庭調査	市内在住の職工

出所：山野光雄：灯をかがげた人々(第16号)

職業紹介事業の開拓者 八浜徳三郎、雑誌・健康保険、東京、1977年

業に従事、親しく下層社会階級の人々に接触して得たる実験と資料とに拠りて論述したるものにして、彼の学者が万巻の書を涉猟し、静かに詞藻を錬磨したものは、自らの其の撰を異にするが故に、敢えて論旨の前後を求む事も能わざるも、実験の事実に迂遠ならざらんことは聯や微力を竭せる所せ」⁽¹⁹⁾とこの本に心意気を語っている。

(2) 職業紹介事業

ア．日本の職業紹介の歴史

大正の始めわが国公益職業紹介事業の、あけぼの時代に「東の豊原 西の八濱」と当時流行した、永井柳太郎氏の定議会における名セリフにあやかった流行語で比較された両先達の存在と功績は大きい⁽²⁰⁾。二人は幾度となく職業紹介において比較されている。

又、くしくも大正九年、「職業紹介法」施行の前年に、八濱は『下層社会研究』⁽¹⁹⁾ 豊原は『労働紹介』⁽²¹⁾を著述している。

「下層社会研究」は前述の賀川豊彦の「貧民心理の研究」(大正四年十一月刊)などと共に今なお識者の注目を新たにしている。

八濱と豊原に焦点を当てて歴史を探ってみようと思う。

この八濱と豊原について、豊原の郷里新潟巻町には巻町双書⁽²³⁾とした「わが国職業紹介事業の父、豊原又男翁」とした図書が出ている。⁽²²⁾職業紹介事業の父、その高風と先駆的業績に翁の恩師佐久間貞一先生を「日本の口パートオウエン」として畏敬する人々

又、豊原又男翁その人を称え「わが国職業紹介事業の父」というなぜであろうか、往年永井柳太郎代議士の帝国議会における名セリフをもじって、当時の「職業紹介人」たちは「西に八濱、東に豊原あり」と称て斯道の東西両先輩にあやかり尊敬したという。「西の八濱」とは、明治末期から昭和初期にかけての大阪基督教社会事業界の大先達として名ある八濱徳三郎氏で「財団法人大阪職業紹介所」の創設経営者。「東の豊原」とはいうまでもなく、東京府職業紹介所長である翁のこと。共にわが国職業紹介事業の草分の大先達である。個人的には中々理解ある親しい間柄の兩人ではあるか、その風格と公けの仕事の上では中々対照的であった。「西に八濱、東に豊原」の名文句もまた、この辺りの事情を反映している。

八濱所長は、商都の大阪人らしい風格の基督者で、その経営する「職業紹介所」も貧しい人々のための慈善救済的な施設であり、主として店員、家事使用人などの職業紹介に重点を置いた。これに比して、豊原所長は「江戸っ子」肌の人情家あり、理論家として知られたその経営する職業紹介所も、労働主義に基く「産業機関」たるに重点を置き、広く産業界に、よき人材をおくる職業紹介を目途とした。そして、この東西両存の当時の姿は「職業紹介所国営問題」論議にも大きな意味を投じた。豊原翁の高風に触れ、その先駆的な業績を語る場合、まずわが国職業紹介事業史上におけるこの事実を想起すべきであろう。」と著者安田辰馬氏は述べている。⁽²²⁾

この事について職業紹介法の制定によって各府県に公営職業紹介所が増設されたので、協調会では従事者養成の為に1921(大正10)年6月6日から東京で第一回職業講習会を開催し将来従事せんとする者も対象としたが、第二回目の10月23日から一週間大阪市中央公会堂を会場として現在職業紹介事業に従事している者の向上を図る事を主目的とした講習会が便宜を図り夜間に開催された。受講生360名、講習課目及講師は次の通り。

- 一、失業保護施設(関 一)
- 二、個人差と職業選択(野上俊夫)
- 三、労働生理及衛生(長谷川卯三郎)
- 四、職業紹介統計(財部静次)
- 五、職業紹介法制(小林鉄太郎)
- 六、職業紹介制度(豊原又男)
- 七、職業紹介実務(八濱徳三郎)⁽²³⁾

共にそれぞれの専門分野を講義したといえる。何か性格的なものもこれに象徴されているような気がする。

又、中島寧綱『職業安定行政史』にも二人について「この二人の先覚者は、こよなく職業紹介事業を愛し、生涯をそれに捧げ抜かれた。共に外国の事情に詳しく、

また得難い名著を残しておられる。後進の指導に情熱を注ぎ、幾多の人材を育てられた。このように共通点の多い二人ではあるが、事業経営の理念は対照的であった。八濱翁は弱者救済の人道的な軍言を心がけ、豊原翁は産業労働者の需給調整機能の発展を強調された。ともあれ、取り組む考え方に違いはあっても、東西の二大先達が日本初期の職業紹介事業の発展に寄与された功績は、はかり知れないものがあった。」と『豊原又男翁』の安田辰馬氏同じような事を述べている。⁽²⁴⁾

また、八濱を師と仰ぐ井上正夫は、「すもうとりで言えば東京の豊原又男か、大阪の八濱徳三郎か、東の横綱西の横綱ですな。これはもう、あんた方は子・孫・曾孫ですな。職業紹介について忘れてくれはったらいかん大恩人ですな。」力を込めて語るように東京には、同時期同様に活躍し、後に「職業紹介の父」ともいわれた豊原又男氏がいた。そして、1919(大正8)年2月に九条職業紹介所ができたころ、東京でも浅草職業紹介所が既に誕生し、活動していたはずであるが、当時は全く連絡を取りあってはいなかったようである。

「そのへん、八濱主任なかなか頑固な、難しい先生でしたさかい、自分の明治44年からやって来られた独特のやり方でしたから、東京あたりと連絡とってどうこうという、そんな気持ちはなかったように思うております。」と語っている。⁽²⁵⁾

八濱の性格を物語る貴重なものと言える。八濱について豊原と比較する文章として1933(昭和8)年執筆「職業紹介事業の精神」がある。

「労働市場としての職業紹介事業に於ては求職者を見ることも恰も一個の商品の如く唯だ需給の調節を計る事のみ急して、動くもすれば其の人格を無視するなきに非ざるは労働市場の濫觴たる欧羅巴中世の「ギルド」又本邦中古の「座」若くは「入市」等が如何に宗教的友愛的な力しかを減らさざるに因る論者稍もすれば斯末の大家ベウアリッチ等が職業紹介事業の人道の方面を軽視し専ら其の産業的方面のみを高調せるに感はされ、期末を似て純然たる産業機関なると唱ふるも、比は彼等が英国救員法の失敗に鑑み特に職業紹介法の産業的方面を誇張せるその特殊の事情を弁へざるが為なり。」⁽²⁶⁾

これに対し豊原又男は『労働紹介』1920(大正9)年12月刊において、「斯く労働紹介は家庭的使用人の周旋紹介に帰属せるも、今や全く産業上必要な機関として労働市場の完成に期待するものにして、生産をして有数なる進展を為さしむると、保護率福に対して欠くべからざる機関として、之を全国的に普及し之が連絡統一を計りて、労力の調節、移民の奨励を企画する為

め其確立を計るべしと為すに至りたり。」と産業労働者に指点をあてている。⁽²⁸⁾

豊原の「東京府中央工業労働紹介所」は1920(大正9)年6月16日、省電「神田駅」ガード下「府公設市場」二階の四間に開設された。経営主体は「東京府社会事業協会」であった。開所後しばらくの間は「顧問」として指導に当たったが、正式に「所長」に就任したのは1921(大正10年)5月1日のことである。同時に従来の名称を廃して「東京府職業紹介所」と改称すると共に「労働交換部」を設け東京府下における公私17カ所の職業紹介所の連絡機関としての機能を発揮することとした。同所の「設立趣旨」「根本原則」「執務要諦」は八濱のそれと似たものがある。

豊原の持論の一つは「職業紹介所は労働市場の“銀行”である」ということであった。

世界の流通経済市場の中心は健全にして信用篤き「銀行」である。銀行は競って優秀なる人材を簡拔し、その育成に万全を期している。その執務は、常に合理的、能率的、奉仕の精神を基幹としている。われわれの「職業紹介所」もまた世界の労働市場の中心的役割と任務をもっている。従って、職業紹介所に職を奉ずる者も、銀行員諸君を範とし、教養高く、奉仕の精神に富み、常に社会、経済の動向を勉強し、研究と調査に努むる人材たるべきであると強調し、豊原所長自ら率先躬行して部下の指導育成に当たった。翁は仕事面ではきびしく、部下に対しては、いわゆるスパルタ教育的面があった。「飯田橋の雷おやじ」といわれ畏敬された所似もっての一面である。反面、年若き部下、青少年をつねに愛児の如く可愛がり、個人的な身の世話から、その近親たちへの心づかいまで細かい点までに配慮し、親身の世話をした。「豊原一家」という家族的な温かいムードがかもし出され、所長を「おやじ」として親しむ明るい職場を生んだ。この人々は名利をよそに東京府職業紹介所職員であることを誇りとし「職業紹介ひとすじ」の道を歩んだ。二十有余年、同所の国営移管後も精励怠ることなかった。そして国営職業紹介所を誕生するにあたって、全国主要府県の「国営職業紹介所」の所長又は幹部職員に発令され、就任した。しかし豊原自身は「この際後進に道をゆずり、第一線から勇退する。」の決意表明があった。豊原精神に生き、発足早々の国営紹介所の運営伸展に尽くした人々は、終戦直後に生まれた労働基準行政の分野に迎えられ、各地方の労働基準局長や労働監督所長として労働者保護のために貢献した。⁽²²⁾東京職業紹介所は大正9年6月16日に産声を上げたが、大正12年9月の関東大震災に駅舎と共に全焼した。その後万世橋時代と

なった。

1940(昭和15)年豊原又男、八濱徳三郎共に、「紀元二千六百年記念式典」において参列の栄光に浴すると共に、社会事業多年の功者として厚生大臣より「聖徳太子御像」の下賜、表彰状、記念品の授与を受けた。豊原は1941(昭和16)年古稀を迎えた。東京九段の軍人会館(現在の九段会館)において「豊原又男翁古稀記念祝賀会」が催された。当日贈呈の「寿像」は翁亡き後、御遺族の芳志により役所に寄託され、現在、東京大手町の労働省職業安定局長室に鄭重に安置されている。1937(昭和22)年11月10日東京阿佐ヶ谷の自宅において静かに安らかに永遠の眠についた、76歳。⁽²²⁾東の豊原の4年後、八濱も1941(昭和26)年10月22日同じ秋に不帰の客となっている。

イ. 日本の職業紹介の歴史 八濱以降

大正9年1月政府は第一回職業紹介業協議会を協議会も六大都市の職業紹介主任者を集め主任者会議を開催し連絡調整の中央職業紹介所を設立した。八濱は所長として私的・公的両面の紹介事業を続けていた。しかし、この事業が管理経営部門において市町村に依託していたため需給調整がこえのみでうまく行われてなかった。

職業紹介法施行直前の公益職業紹介所は384ヶ所だったものが僅か49ヶ所(内、私立は18)ヶ所にすぎなかったという。⁽²⁸⁾

1939年悲願の職業紹介事業が国営化された。八濱の財団法人大阪職業紹介所は役目を終え幕を閉じた。都道府県主要個所に職業安定所での業務となった。現在失業率も八濱の時代と同じ状態といえる。フリーター・ニートの存在を八濱はどうするであろうか。

第3章 八濱徳三郎の業績

(1) 職業紹介の実績

大阪における職業紹介の歴史は、1911(明治45)年、永速区恵比須町に開設された財団法人大阪職業紹介所に開幕される。1908(明治42)年内務省地方局では、東京、大阪の二大都市に公設職業職業紹介所の必要を感じ、両市に対し其の設置を奨励した。之に対し東京市では1910(明治44)年浅草、芝の二カ所に市営職業紹介所を設置したが、大阪市に於いては容易に之が設立を見るに至らなかった。

此の時、青木庄蔵市議会議員は、岡島千代造等の有志と図り、数カ所の職業紹介所を創立する計画を立て、1910(明治44)年2月その設立趣志書を発表し、有志の協力を募った。

此の運動に関し、敷地について付近住民より、又事

業に対して私営業の口入業者や、木賃宿業者より反対運動が猛烈に行われたが、屈せず翌45年2月財団法人の許可を得、同年6月より職業紹介並に宿泊救済事業を開始した。⁽²⁹⁾

前述の『大阪府社会事業史』によると「人口集中大都市特に我大阪の如き商工業の旺盛全国に比類なき大都市に於ける多数の失業者域は下級労働者を救済保護し、是に適當なる職業又は労働を紹介して彼らの正業より離るるの危険を防ぎ且つ 宿者浮浪者の為に弊害を伴はざる施設の下に清潔にして簡易なる宿舍を設備することは、単り産業労働界の健全なる発展を企図する上に必要なるのみならず、又実に社会政策上欠くべからず緊急の施設なりとす。乃ち歐米諸国にありては夙に是等の公益的職業紹介機関の発達著しきを視ると難も、我国に於いては未だその施設の充分ならざるを遺憾なりとし、前大阪市議員青木庄蔵氏は之が設立の急務を市内署名の実業家岡崎千代造、岡崎伊八、中村伊三郎、金沢利助、森兵衛等の諸氏に諮る所あり。…爾來八濱徳三郎氏専ら之が経営の任にあたり大いに力むる所ありしかば事業着々として発展し其の成績も觀るべきものあり。越へて大正5年1月より同所附属事業として浮浪少年をも救済すべき少年ホームの施設をも試みた。」

所在地は南区恵美須町、紹介規定として定めた条件は、求職者は職工、日雇の外は市内に一戸を構える確実な保証人を要し、紹介された場合には通信費として金五銭を納め、3回以上紹介された者、又は短時日でも一旦就職した者は更に求職申し込みの手続きを要することとし、紹介先で雇入れられた場合、電話又は葉書を以て其の旨同所に通知し、先方の要求に合致しないとか自己の都合の為に就職しなかった時には紹介状の封筒に先方の捺印を貰って持ち帰り通信実費領収券と共に受付の差し出すこと等であった。尚、先述せる如く附属施設として労働寄宿金(明治45年8月開始、一泊金5銭)少年ホーム(大正5年1月創設、18歳未満の男女にして不良行為なき者及び重き疾病又は伝染病疾患に罹り居らざる者に限り収容)⁽²⁷⁾がある。

『年譜』によると「明治44年12月財団法人大阪職業紹介所、設立ヲ計画シ同設立趣志書を發表ス 同45年(42歳)1月財団法人大阪職業紹介所主事二就任ス」となっている。

青木は東京で原胤昭や留岡、あるいは、麻次らと会見し、彼らの大なる貢献を得て、留岡より八濱の推薦を貰い、友人である岡島千代造らの協力を得て実現の運びに至ったのである。八濱にとって大阪は「職業紹介所に就いて」『救済研究』第3巻9号1914(大正3)

年9月25日の論文の中に「私は12、13歳の頃、数年大阪で丁雅奉公を致して居りましたが、今は私がこの事業に従事するにあたりまして、私は最も利益を与えて居るのは此の丁稚時代の経験でございます。自分が十数年学窓に於いて雪の苦を積んだことよりも、寧ろ丁雅をして川に水を汲み丁稚は丁稚車を曳き、或いは掃除夫は掃除等をして散々苦しんだ事が、今日私に大なる力を与えている。」と少年時代の原体験を追想するに懐しい土地柄でもあった。⁽³⁰⁾

大阪職業紹介所を設立したのは、明治45年のことだったが、前述のように、幾多の難関が待ち構えていた。「第一は同所が旧今宮村共同の宝庫(御諭旨を泰安した)に隣接していたので「這般の地域に労働者を出入りせしむるは皇室に対し不敬なり」という付近住民の反対と同業者の反対運動であった。『わが半生を語る』によれば、こうした反対運動も反対派の有力者に今宮戒神社に募ってもらい、職業紹介並に労働者保護事業の必要について演説し、彼の情熱でもって説得している。開設当時彼の居室には「自省」の文が掲げられていたという。この文については漢子も見た記憶があるという。前述の、室田保夫は「八濱は牧職を捨てざるおえなかったけれども、キリスト者としての精神までも放棄しなかったと思われる。この「自省」の中には「人としての弱者」=「人格主義」(生存権思想)と「神としての弱者」=「基督の人格再生の秘儀」という八濱の基本的視座がある。逆説的だが俗として「主事」にあることが、彼にとってキリスト者の証しであり、神への忠誠であったと言えるか。」と述べている。⁽³¹⁾

確かに自らの過去から一つの大きな物への挑戦をこころみている訳である。こうした八濱の内面の力を、大阪では必要としていたといえよう。『年譜』に添って彼の職歴について資料として述べた。社会福祉に関するものであるが、74歳までその熱き想いを職業紹介事業を遂行していく上で対象者自ら要求に応え、人格を高揚していたと言える。

(2) 大正期における公的紹介事業と民間紹介事業

大正7年12月、米騒動の直後、政府は救済事業調査会に対し失業対策について諮問した。翌年三月同調査会は「失業保護に関する施設要綱」を答申し、都市に於ける職業紹介所の設置と拡充の必要性を達言した。またワシントンにおいてILOが開催され、その中で参加国に公益職業紹介所の設置を促す勧告案が決議された。大正9年1月我国の政府は第一回職業紹介業競技会を協議会も六大都市の職業紹介所主任者を集めて第一回職業紹介主任会議を開催した。こうして連絡

調整の中央職業紹介所を設置した。こうして職業紹介法が生まれた。⁽³¹⁾

八濱はこの法について「本邦に於いても職業紹介所相互の連絡統一、若しくは雇傭両者の需給調整等の声のみ彼らに高くして、未だ曾ても実の挙げらざるは、其の管理経営を全く市町村に委任せざるが為なり。イギリスの如く全国の公益紹介所を国家的管理の下に移すは刻下の急務なり」と論じている。⁽³⁰⁾

職業紹介法施行(大正10年)直前の公益職業紹介所は384カ所であった。この普及のテンポはその前年頃から急に早まったようである。しかし、新しい職業紹介法によって国庫補助を受けるには、政府の定めた新しい補助要件を満たさなければならない。専任職員を置くとか、施設の整備などが必要である。その結果、適格な職業紹介所として残ったのは、僅か49所(うち私立18所)にすぎなかった。

職業紹介法の制定に力を得て、職業紹介所は全国的に増加して行く。大正11年に始まり、5年後の大正15年には187所、10年後の昭和6年には421所を数えるようになった⁽³¹⁾。

初期の無料の職業紹介事業は宗教団体や社会事業団体によって始められ、広められたものである。それらの団体の人々が職業紹介に取り組んだ奉仕と犠牲の精神は公立職業安定所の手本とされた。経営の責任者から一般の職員に至るまで、そうした心構えは行き渡り、お役所的運営の心配が杞憂に終わったといえる。厳しい失業情勢の中で求人はいく少なく、訪れる求職者に満足な紹介ができないという問題はあった。しかし職業紹介所の取り扱いがお役人的だとする声はほとんど聞かれなかった。

その頃八濱の愛吟歌に、

手をとりにて共に泣かばや 泣く人の痛む心に心
あわせて 泣く人の涙たづねてぬぐわなむ
わが眼めぐいし袖をすすぎて

“泣く人”とは、職が無くて泣く求職者。彼らに対する接遇のあり方を、この歌に託して指導したといわれる。求職者の涙を体し、常に奉仕の精神と下座の必要を説かれた。大正から昭和にかけて、職業紹介所の職員に愛用されたものに『職業紹介所従事員執務の菜』がある。職業紹介所での受付、紹介、記録、外交、電話係等の係りごとに仕事の進め方や注意事項が載っている。大阪市立九條職業紹介所が新設された大正10年に所長となった八濱が自分の体験と理想を織りませ所員の心得書として作られた。全国の職業紹介所の所員の手引きとなった。例えば受付係の項に「一、受付係は親疎の別なく温顔を以て人に接し茶謙以て人を待ち、

常に人をして春風駘蕩の裡にあるの思いを為さしむべし」。

大阪の市立職業紹介所は午前7時から午後7時までの一日12時間。日雇労働紹介の窓口は早朝の6時頃から開かれた。

大阪市九條職業紹介所は、二階建ての二階に開設(大正8年)された。一階は市立の簡易食堂であった。当時の公立の無料職業紹介所は、無料宿泊所、簡易食堂など貧困者対策の施設と併設されることが多かった。一階の専用入り口には、のれんが掛けてあった。職員は6名程度で全員が前垂れかけの執務であった。八濱徳三郎所長も粗末な木綿の着物に、角帯、前垂れ姿、商人のような物腰で応接した。来所者は、たとえ目的が満たされなくても、文字どおり、前垂れかけの精神による親切な接遇に満足して帰ったという。求人の申し込みが乏しいので職員は暇を見つけて、求人開拓に出て行った。ズックのかばんに求職票の副本を入れ、市内目ぼしい、事業所を訪ね回ったそうである。⁽³²⁾

職業紹介所を訪れる求職者は千差万別である。中には無理難題を持ち出して暴言を吐き大声で怒号する者もいる。酒を飲んできて、暴れ回ったりもする。始末に困って、警察の手をわずらわすこともたびたびである。こんな日が続くと、ほとほと仕事がいやになり、何度が辞めようと思ったことがあるそうだ。けれども、長い失業のため、心がすさむのは無理からぬこと。すべての求職者が乱暴者とは限らず、彼らの辛い心情は同情にたえない。世のため、社会のために働こうと覚悟した者が、これではいけない。辛抱も修養も足りないと思つて反省し努めたそうである。「朝から晩まで面接していても、求職者のすべてに満足のいく紹介はできない。気落ちして帰る後ろ姿を見るにつけ求人の乏しさが悲しく、悩みは増すばかり。」と古老の述懐である⁽³³⁾。

(3) 家族とのかかわり

徳三郎は「てる」との間に四男一女、「ツル」との間に三男三女をもうけている。実に明治33年より昭和4年までの長きに渡る。30歳より45歳迄である。義和、康和、弘和、宣和、賤子^{シズ}、漢子^{ナミ}、晶子、清和、寛和、正和、東子^{ハル}、氏であるが、弘和、宣和、清和は幼くして亡くなっている。現在、生存しているのは友田漢子^{ナミ}、植野東子^{ハル}のみである。

二女、漢子の父親観は「1.教育熱心、子供達にもスパルタ式教育、2.村の掃除を一人、早くからするまじめな面 3.厳しい父」との事であった。1.についてのエピソードは、女小説、マンガは一切買ってもらえなかったが、学校で使用する本はすぐ購入していた。映画に行くのも一人では絶対に許可して貰えな

かったため妹と二人で外出し、天王寺で別れ、一緒に行ったような顔をしてまた、二人が落ち合うというように誤魔化していた。兎に角厳しい父親であった。今恵比須は子供を育てる上で環境が悪いと昭和元年に南海線添いの家に引っ越した。小学校一年の時父が保護者会の会長になったが高架道路建設のため再度、引っ越さなければならなくなったが、「一年の途中で会長を降りられては困る。」と学校側から言われ、住吉に仮住まいをして四年生で天王寺に移るまで会長をしていたようで八濱の実直ぶりを物語るものである。また、兄達が通知簿持ち帰る日には棒を持って玄関に待ち関所番がいた。漢子自身もよく蔵にほり込まれ怖い体験がある。2. 退職後の晩年、大阪府中河内郡矢田村（現在の東住吉区矢田）で朝早くから竹箒で村のメイン道路を毎日きれいに掃除されていたようで、医専に行く途中よく会っていたが恥ずかしく気付かれないようにそと道の端を行き来していた。隣町が同和地区だったが、こうした貧困に喘ぐ人々が通る道を清掃しながら、心のふれあいを仕事に出かける労働者の方々に求めていたのではないだろうか。朝5時頃からとの事で何時間も何を考えながら生活されていたのだろう。3. 厳しい父との事では活用教会での事から、山野光雄氏は『福祉社会の開拓者たち』の「八濱徳三郎」の中で「徳三郎自身は牧師であり、熱心なキリスト教信仰の人だったことは当然だが、子供達にも信仰を強いる事は決してせず、その自由にまかせた。」とされている。漢子氏にこの山野氏の話をするとし「しかし天満教会だったと思うがよく説教に行っていた。あちこちの教会に行ったが、子供でありながら父のような説教をしてくれないかなあー。とよく思っていた。きっと生活が身近な説教だったせいだと思う。考えにつまった後、父は無教会主義者になった。しかし、兄妹弟、かならず教会に行かされた。労働者救済にキリストの精神が生きていたと思う。厳しい人であったが、労働者には親われ、今宮恵比須で暴れていても緋に角帯をしめて父が現れると、すぐに喧嘩も収まった。父がキリスト教に入ったのは、おとうさん（里吉）が酒飲みだったからと違いますか。同志社で新島先生には可愛がられ、見込まれていたように思う。それで洛陽教会に就職できたように聞いている。しかし、もっと貧しい人々のいる神戸に加賀豊彦先生を求めてかわって行った。同志社時代一緒に下宿していたグリーンの影響で早くから（大正期）テーブルで食事をし、パンや牛乳という現在の生活をしていた。

井上正夫については数年前我家で父の記念会をした時来て頂いたと聞く。漢子は聞き取り当時74才で午前

中は開業医、午後は保健所の囑託として現役勤務していたが、現在は引退している。堺市の教会でイースターの祝いを一緒にしたこともある。

又、長男、義和さんの妻故和（2006年2月死亡）の話では、八三郎は特に家族には厳しく、自分自身にも厳しい人物のようである。

八三郎が亡なる半年前に奈良市西大寺に移住。それまでは矢田で正和と一緒に過ごし、日曜日になると朝早くから義和を訪れ夕方になると又帰るという生活を規則正しく続けていた。矢田と比べ西大寺は庭もあり、のんびりとした優雅な生活が気に入ったらしく、西大寺移住後は俳句を趣味とし縁側で本を読むといった生活で晩年を心行くまで、思うままの余生を過ごした。彼にとっての最大の喜びは昭和12年、戦雲あわただしい時代とはいえ、職業紹介事業がすべて国の事業となったことであろう。大正8年の草分け時代を身をもって知っている方々は、もういないだろうとの漢子氏の聞き取りより八濱に関わりのある関係者の調査に即応性を意識した。八濱側近の井上も晩年を堺市で過ごし90歳までの生存は確認しているが現在不明と聞き堺市役所で尋ねたが不明だった。

おわりにかえて

吉田久一他小倉襄二：八濱徳三郎、人物つづる近代社会事業の歩みの一部「日本近代社会事業略年」を見てこの論文に取り込むことになったがこの中に記されている八濱の事項は

- 1871年 八濱徳三郎 岡山県笠岡に生まれる。
 - 1891年 八濱、同志社神学校入学。
 - 1896年 八濱、大阪、神戸で伝道を始める。この間に職業紹介事業への挺身を決意。
 - 1912年 八濱、財団法人大阪職業紹介所の常任指導者となる。その後大正職業紹介事業、少年ホームなどを経営す。
 - 1923年 八濱、禁酒団体青木匡済財団評議員となる。職業紹介、失業防止、労働者保護に活躍
 - 1951年 八濱、永眠
- である。

墓地については、山野光雄は「灯をかかげた人々（第16号） 職業紹介事業の開拓者 八濱徳三郎」の中で不明としていたが、1993年当時笠岡市市史編纂室の谷口靖彦の調査で、笠岡小学校裏の墓地が解明、また京都若王子の小山にあることが判明した。

88歳になる漢子からの電話での聞き取り（2007年）のよると「昨年息子夫妻が笠岡の父の墓前に初めて代参した。若王子にはずーと以前、息子の背に負われて

参拝したが今は闘病中なのでどちらも行かない。」しみじみと語っていた。

筆者自身は現在も笠岡の墓地に彼岸・盆参拝している。八濱和から京都若王子の墓地に同志社大学の新生徒が新島譲に参拝後八濱の墓の傍を通過して下山すると聞いていたので1993年に訪ねたが、特に急な山道で困難であった。この参拝は背負う者・背負われる者共に厳しく大変であったと想像できるが、漢子親子の素晴らしさに感激した。

徳三郎、昭和七年回顧(わが半生を語る)の中で「然し乍ら社会事業に於ける20餘の私の体験から云へば、ナザレのイエス・キリストの名に依りて事業を営み、パンよりも職業よりも何物よりも先ず第一にナザレのイエス・キリストを與ふるにあらざれば、其の事業は失敗であり空虚であると堅く信じて疑はざる者であります。」としているが、キリスト教の信仰は、生涯徳三郎の思想や精神的支柱になっていたと思える。前半を牧者として、後半を社会事業家として特に晩年は地域ボランティアとして、室田の言うキリスト教の人道主義・社会改良主義の理想と現実的实践をした。これについて、二女漢子も「その母胎には無教会主義になりながらもキリストの教えが脈々と存在していたに違いない」と語っている。

この論文の手直し機会は数回あったが八濱和をはじめ多くの先人からの聞き取りが出来なくなる現実に『歴史は生きている。時期を外すことの出来ない闘いだ。』と感じ、まだまだこのテーマに挑戦して行きたいと考えている。最後に室田をはじめ数々の方々に感謝を評したい。

注 記

- (1) この『八濱徳三郎年譜』は奈良市八濱和氏所蔵。長男義和氏により「昭和26年10月22日(81才)長男義和氏宅にて老衰のため死す」と付記され、長男の妻和氏により「昭和26年10月24日午後2時葬儀を行う」昭和54年9月20日写す八濱和と別書されている。和への聞き取り調査によると「義和氏一周忌に親族(徳三郎子、孫)に徳三郎氏の偉業周知のため配布した」との事である。
- (2) 片桐麟太郎は(1863~不明)1886年に同志社に入学し1888年に卒業している。主に笠岡教会をはじめ岡山地方や上毛で教会活動をし、地方の発展に尽力した人物である。8浜の同志社入学にも影響を与えたことは十分に考えられる。室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究、p.230 注(3) 不二出版、東京都、1994年
- (3) 笠岡市市史編纂室 八濱家除籍簿抽出資料より
- (4) 『基督教新聞』第675号1896(明治29)年7月10日近代日本キリスト教新聞集：日本図書センター発行マイクロフィルム23号
- (5) 古今占ト考の内容としては六合雑誌：近代日本キリスト教新聞集、日本図書センター発行マイクロフィルム第208号~第210号に至るまでに(1)の鹿トから(24)までに古事記、大政官式、延暦大神宮儀式帳、玄同放言、猿楽、謡曲、平家物語、平盛衰記、万葉集、和泉式部の歌、源氏物語の歌、懐古集の歌等数々の記述がある。
- (6) 『年譜』によると『迷信の日本』出版 米国宣教師グリーント共に『福音叢誌』の編纂ニ 従事ス」とされている。2女友野漢子の聞き取り調査では「同志社・洛陽時代に一緒に暮らしていた。」と父八濱徳三郎から聞いたようだ。
『年譜』によると「明治31年(28歳)東京に移り留岡幸助ト共ニ基督教新聞ノ編輯ニ従事ス」となっている。
- (7) 同志社大学人文科学研究部編：留岡幸助著作集第四巻 p.130 同朋舎出版、1980年室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究 p.197、不二出版、東京都、1994年
- (8) 基督新聞：近代日本キリスト教新聞集、日本図書センター、マイクロフィルム26号
- (9) 基督新聞：近代日本キリスト教新聞集、日本図書センター、マイクロフィルム30号
- (10) 山野光雄：続 灯をかかげた人びと(第16回)職業紹介事業の開拓者 八濱徳三郎、雑誌健康保険、p.135、東京都、977
- (11) 迷信の日本 p.4 室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究、p.199、p.231 注(12)(23) 不二出版、東京都、1994年
- (12) 室田保夫：前著 p.199
- (13) 八濱：「我が基督の神性を信ずるの理由」東京毎日週新誌第596号1902年
室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究、p.207、p.233 注(32) 不二出版、東京都、1944年
- (14) 昭和7年1月同志社神学館での講演筆記であるが前著、室田保夫『キリスト教社会福祉思想史の研究』の中で『無宿男劣働昭和6年報』(昭和7年7月、大阪労働共励館)にも収載されていると述べている。
- (15) 室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究、p.201、p.231 注(17) 不二出版、東京都、1994年、より『洛陽教会五十年略史』p.6
- (16) 吉田久一他小倉襄二：八濱徳三郎、人物つづる近

- 代社会事業の歩み、p.134 全国社会福祉協議会、東京都、1971 日本基督教社会事業史、p.280より
- (17) 室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究、p.211、p.233 注(39)不二出版、東京都、1994
- (18) 山野光雄：灯をかけた人々(第16号) 職業紹介事業の開拓者 八濱徳三郎、雑誌・健康保険、東京都、1977年
生江孝之：人道、第115号 1914年
- (19) 1913(大正2)年より1918(大正7)年にいたる六年間に新聞・雑誌に公にしたものを一冊の著書とした『下層社会研究』東京文雅堂 1918(大正9)年
吉田久一：救済研究復刻版、救済研究第2巻9号(大正3・9・25)1975年
- (20) 山野光雄：灯をかけた人々(第16号) 職業紹介事業の開拓者 八濱徳三郎、p.138、雑誌・健康保険、東京都、1977年
- (21) 安田辰馬：職業行政史 古典シリーズ(一)、職業紹介序説、清流創刊号、財団法人日本職業協会、東京都、1979
- (22) 安田辰馬：豊原又男翁、書、p.66～p.69 巻町双書、巻町
- (23) 社会福祉法人大阪社会福祉協議会編；大阪府社会事業史、大阪社会福祉協議会大阪府、1958年
- (24) 中島寧網：職業安定行政史、p.81～p.82 社団法人雇用問題研究会、東京都、1988
- (25) 「のれんに角帯」草分け時代最長老井上正夫氏が語る大阪府の職業紹介のはじまりごろ、大阪職安月報169号 大阪府、1977年
- (26) 安田辰馬：職業行政史 古典シリーズ(43)、八濱徳三郎先生緒 職業紹介事業の精神 職業紹介拾年、清流43号(盛夏号)財団法人日本職業協会、東京都、1979
- (27) 豊原又男：職業行政史古典シリーズ(一)『労働紹介』序説 清流創刊号
- (28) 社会福祉法人大阪社会福祉協議会編；大阪府社会事業史、p.358 大阪社会福祉協議会 大阪府、1958年
- (29) 青木匡教財団編；青木庄蔵：回顧75年、青木匡教財団、大阪府、1917
室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究不二出版、東京都、1994年より
- (30) 八濱：職業紹介所に就いて、救済研究3(9)1914.9.25
室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究、p.213、不二出版、東京都、1994年
- (31) 室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究、

- p.214、不二出版、東京都、1994年
- (32) 中島寧網：職業安定行政史 p.78、社団法人雇用問題研究会、1978
- (33) 中島寧網 同掲書 p.88

参考文献

- ・八濱徳三郎：八濱徳三郎年譜1981～1951
- ・室田保夫：八濱徳三郎研究序論、キリスト教社会問題研究三〇号、同志社大学人文研、京都府、1972
- ・室田保夫：キリスト教社会福祉思想史の研究、不二出版、東京都、1994
- ・資料紹介八濱徳三郎稿「基督の道話」室田保夫 高野山大学論 第22巻 1977
- ・生江孝之：日本基督教事業史、1931
- ・中島寧網：職業安定行政史、社団法人雇用問題研究会、1988
- ・山野光雄：灯をかけた人々「八濱徳三郎」雑誌「健康保険」五月号、1977
- ・「大阪社会事業史」社会福祉法人大阪社会福祉協議会刊、1958
- ・「のれんに角帯」草分け時代の最長老井上正夫氏が語る 大阪府の職業紹介のはじまりのころ 大阪職安月報第169号、1977
- ・安田辰馬：職業紹介史古典シリーズ(43)八濱徳三郎先生著職業紹介事業の精神、清流43号、1979
- ・豊原又男：職業行政史古典シリーズ(一)『労働紹介』序説 清流創刊号、1979
- ・八濱徳三郎：職業行政史古典シリーズ(三)『公設桂庵』清流三号、1979
- ・吉田久一他：小倉襄二 八濱徳三郎、人物つづる近代社会事業の歩み、全国社会福祉協議会、東京都1971
- ・同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集』第四巻、p.130 同朋舎出版、1977
- ・中条明子：八濱徳三郎 その社会事業思想、聖母女子短期大学児童教育学科研究紀要第4輯、聖母女子短期大学、1977

資料

- 年譜に添った八濱徳三郎の職歴
- 明治45年1月 財団法人大阪職業紹介所に就任す。
- 大正3年12月 財団法人天満職業紹介所を設立し常務理事に選任せらる(44才)
- 大正5年 財団法人大正労働紹介所を設立し理事に選任せらる(46才)

大正6年	財団法人大阪少年ホームを設立し幹事兼主任に選任せらる(47才)		として表彰状並に金牌を贈られる(65才)
大正8年2月	財団法人大阪職業紹介所常務理事に選任せらる(49才)	昭和11年9月	満州国社会事業大会開催に際し同会指導員として出張し、奉天、新京、ハルビン、撫順、大連等の各地を視察し帰途朝鮮に立寄り平壤、京城その他を視察し且つ金剛山を遊覧せり。
2月	現職のまま大阪市救済事務(後に社会事務と改称す)囑託を命ぜられ紹介係主任を兼務す		
大正9年7月	財団法人協調会囑託を命ぜられ職業紹介事業の普及のため各地を巡回講演す(50歳)	昭和13年2月13日	恩贈財団慶福会総裁大勲位載仁親王殿下より30年以上私設社会事業に従事し民象福祉の増進に寄与したる事らざるのを次で表彰状並に金200円を贈呈
大正10年7月	職業紹介法執行に依り大阪職業紹介所長に任ぜられる(51歳)		
大正11年	大阪市社会事務囑託を辞す(52歳)		
大正12年	大阪職業補導会主事を命ぜられ短期技術講習、公設質、賃銀立換払を主管す(53歳)	昭和13年12月	職業紹介所国営実施につき財団法人天満職業紹介所解散せる為同常務理事を辞す(68歳)
大正15年3月	大阪地方職業紹介委員会委員を命ぜられる(55歳)	昭和14年4月1日	職業紹介事業国営実施せられたるに依り財団法人大阪職業紹介所は職業紹介事業を廃止すると共にその名称を財団法人恵比須会館と改めもっぱら宿泊事業を經營することとなりたるた同所長兼常務理事を辞任し同館顧問に推挙せらる。(69歳)
10月	大阪府失業防止会委員を命ぜらる		
昭和3年11月10日	社会事業切労者として内務大臣より表彰状並に銀杯を下付せらる。		
11月16日	大饗第一日の御儀行はせらるに当たり大阪府饗せん場に於いて饗せんを賜り記念品を下贈せらる		
昭和4年2月14日	大阪府御礼記念社会事業、大阪労働共励館の經營を委囑せられ同館長命ぜられる(59歳)	昭和15年3月31日	大阪労働共励館大阪府に移管されるに付き同館長を辞任(74歳)
6月4日	大阪府庁にて天皇陛下に拝謁仰付らる	10月10日	厚生大臣より多年社会事業に従事しその功績顕著なるをもって表彰状並に紀元二六〇〇年にあたり聖徳太子御像を贈られる。
11月10日	新宿御苑観菊御会に御召を受く		
昭和6年11月3日	職業紹介法施行滿十年に際し内務大臣より表彰状並に謝状を受く	10月10日	紀元二六〇〇年記念社会事業大会会長より多年社会事業に従事し社会福祉の増進に貢献する所からざるこれをもって同大会総裁大勲位宣仁親王殿下の帝允もとにより表彰状並に功労賞を贈らる
昭和6年12月10日	大阪府社会事業統制委員会委員を命ぜらる(61才)		
昭和7年11月12日	陸軍特別大演習統監の為め天皇陛下大阪府に御駐在の切畏くも大阪労働共励館に待従御差遣の栄光に浴す	10月10日	大勲位寛仁親王殿下宮邸のお茶会に社会事業功労者として召を受く。
11月14日	歩兵第八隊營にて贈の宰事をあげさせらるるに当たり社会事業功者		